

鳥越
一朗

教科書に載っていない
明治風俗逸話集

おもしろ 文明開化 百一話



異例の短期間で近代化を達成した明治の日本。しかし、新政府の急激な欧化政策に、庶民たちはドタバタの連続だった.....



目次

装い

1	男の洋服く犬に吠えられるく	16
2	女の洋服くアヒルが文庫を背負ったようく	19
3	散切りく吊るされた数百の鬚く	21
4	束髪く乃木將軍が嘆いた「二百三高地」く	24
5	お齒黒禁止く電信普及でぶり返しく	26

食

6	牛鍋く角のない「牛肉」く	28
7	カレーライスくカエルがネギ背負った？く	31
8	ビールく「ビヤホール」は和製英語く	34

住・街

9	牛乳くブリキ缶で配達されたく	36
10	コーヒーく牛乳の臭みを消す香料だったく	39
11	ラムネく殴るのに便利だったラムネ瓶く	41
12	氷水（かき氷）く五稜郭から氷を運ぶく	43
13	煙草く熾烈な広告合戦く	45
14	擬洋風建築く日本人大工の独創性く	48
15	ガス灯く占いによって灯った？く	50
16	アーク灯く昼と見まがう明るさく	52
17	凌雲閣く日本初のエレベーターは釣瓶式く	54
18	奇怪な人造富士く暴風でもろくも崩れた張りぼて展望所く	57



生活

- 19 石油ランプ～普及が進むと国が亡ぶ？～ 59
- 20 銭湯～日に九十回も入浴した男～ 61
- 21 太陽暦～間違えられた婚礼の日～ 63
- 22 定時法～難しかった時計の見方～ 66
- 23 マッチ～お化けと勘違いして気絶～ 69
- 24 勧工場～明治のショッピングモール～ 71

身分

- 25 華族～探偵が不祥事を捜査～ 73
- 26 士族の商法～落語のネタがごろごろ～ 75
- 27 苗字～いい加減な命名法～ 77

治安

- 28 結婚～破綻した「契約結婚」～ 78
- 29 廃刀令～摺子木を腰に～ 82
- 30 仇討ち禁止令～それでも父の仇を討つ～ 84
- 31 徴兵令～頻発した徴兵逃れ～ 86
- 32 巡査（邏卒）～あだ名は「三尺棒」～ 89
- 33 事件簿一～毒婦～ 91
- 34 事件簿二～暗殺～ 94
- 35 事件簿三～ピストル強盗～ 96
- 36 消防～作動に時間のかかった蒸気ポンプ～ 98



交通

37	一銭蒸気〱年間二百万人が利用〱	100
38	陸蒸気〱年寄りが手を合わせる〱	102
39	人力車〱日本人が発明した文明のリキ〱	105
40	鉄道馬車〱都電の軌道幅に痕跡が残る〱	108
41	自転車〱初期には様々なタイプがあった〱	111
42	電車告知人〱走りながら通行人に危険を知らせる〱	113
43	道路事情〱武士も納得の左側通行〱	115
44	軽気球〱ラッキョウのお化け?〱	117

通信・郵便

45	電信〱電線に手紙をぶら下げる〱	120
----	-----------------	-----

情報

46	郵便〱ポストがトイレに〱	123
47	電話〱「もしもし」ではなく「おいおい」〱	125

文化・流行

48	新聞〱前代未聞のお葬式〱	127
49	雑誌〱硬派と軟派〱	131
50	写真〱賊将の偽プロマイド〱	133
51	天気予報〱人気を呼んだイラスト入り予報〱	136
52	兎ブーム〱ペットというより投機〱	138
53	サーカス〱人気を博したチャリネ曲馬団〱	140
54	裸体画〱人垣ができるほどの騒ぎに〱	142



55	小説家〓ズボラ者の集まり〓	145
----	---------------	-----

56	博覧会〓暑さで溶けたお菓子〓	148
----	----------------	-----

57	新派〓役者募集に応募者殺到〓	150
----	----------------	-----

58	娘義太夫〓明治のアイドル〓	152
----	---------------	-----

59	活人画〓奇妙な芸能〓	154
----	------------	-----

音楽

60	洋楽〓喝采を浴びた薩摩藩軍楽隊による演奏会〓	157
----	------------------------	-----

61	蓄音機〓初めて録音された日本人の声〓	159
----	--------------------	-----

62	唱歌〓日本人の心にしみる「ヨナ抜き」〓	161
----	---------------------	-----

公共施設

63	公園〓キツネやタヌキ、「妖物」が出没〓	163
----	---------------------	-----

64	動物園〓トラとヒグマを交換〓	165
----	----------------	-----

65	鹿鳴館〓スキャンダルにまみれた文明開化の代名詞〓	167
----	--------------------------	-----

遊び・スポーツ

66	競馬〓馬券の代わりに切手〓	169
----	---------------	-----

67	体操〓女子の活発化を増長?〓	171
----	----------------	-----

68	ボウリング〓チヨンマゲ姿でピンを立てる〓	173
----	----------------------	-----

69	運動会〓きっかけになった「競闘遊戯会」〓	176
----	----------------------	-----

70	水泳〓乙姫か清姫か、女子の泳ぎ〓	178
----	------------------	-----

国際

71	ラシャメン〓羊に例えられた女たち〓	180
----	-------------------	-----

72	お雇い外国人〓当たりはずれの大きかった〓	183
----	----------------------	-----



政治

73	移民～どさくさ紛れの人身売買？～	186
74	東京遷都～遷都ではなく奠都？～	189
75	廃藩置県～当初は三百五もあった府県数～	192
76	官員～あだ名はナマズ～	196
77	地租改正～囚人を使って暴動を鎮圧～	198
78	裁判～間男に杖打ちの刑～	200
79	違式註違条例～明治の軽犯罪法～	204
80	演説～美人弁士に求婚者殺到～	207

経済

81	新紙幣～金毘羅の御札と間違えて神棚に～	210
----	---------------------	-----

性風俗

82	西郷札～争奪戦が起こるほどの人気～	213
83	銀行～百五十三もあった「国立銀行」～	215
84	財閥～丸の内に虎を飼う？～	217
85	生命保険～寿命が保証される？～	219
86	工女～外国人に生血を吸われる？～	221

教育

87	芸娼妓解放令～「牛馬ときほどき」と称された～	223
88	混浴～何度禁止されても無くならなかった～	226
89	春画～貸すのはOK？～	229
90	小学校～子供を集めて生血を絞る？～	231



91	師範学校／女子にも開かれた教師養成機関／	233
92	女学校／ファッショナブルな「海老茶式部」たち／	234
93	東京大学／卒業式をボイコットした東大生たち／	237
宗教		
94	廃仏毀釈／火葬、托鉢までが禁止に／	240
95	キリスト教容認／明治八年のクリスマスパーティー／	243
医療		
96	医者／和製アバクネイル／	246
97	看護婦／憧れの「白衣の天使」／	248
98	コレラの流行／不吉な「黄色いハンカチ」／	252
99	ペスト／懸賞金を稼ぐ鼠捕り男／	255
100	脚気／治療法を巡って漢方医と西洋医がバトル／	258
101	養育院／「帝都の恥隠し」と揶揄された／	261
まえがき		
関連年表		
主な参考文献		
奥付		

装い

1 男の洋服く犬に吠えられる

文明開化はまず日本人の外見を変えていく。江戸時代後期の男の服装と言えば、武士では袴はかま（羽織袴はおりはかま）、平民は小袖こそでが基本であった。幕末になって開国が進むと、幕府は長州征伐を機に西洋式の軍服を導入するようになる。最後の将軍・徳川慶喜よしのぶがナポレオン三世から授かったフランス式の軍服を着て、さっそうと直立する写真は有名だ。

一方、諸藩も同様の動きを見せ、攘夷じやういを標榜ひょうぼうする薩摩藩の海軍や長州藩の奇兵隊も、洋式の軍服を取り入れている。軍服は基本ツープースであり、上着は袂たもとのない筒袖つっそで、ズボンは袴を細く縛った段袋（ダンブクロ）が使用された。

慶応三年（一八六七）の暮れ、鳥羽伏見の戦いの直前に勤皇軍の観兵式が京都で行われた時、伊東祐磨すけまろ率いる薩摩海軍の一隊がイギリス式の軍装（フランスを頼った幕府に対し、薩摩藩はイギリスの支援を受けていた）で登場すると、

「そんな姿で天皇の御前に出るとはけしからん」という声が、強硬な攘夷派から上がった。

あわや伊東は切腹か、という緊迫した空気になったが、王政復古の主導者の一人である西郷隆盛さいこうたかふ

盛もりが出てきて、

「ダンブクロが悪けりや、洋式訓練はもつといけまい」と一喝して、事態は収束したという。

近代の戦争は総力戦であり、戦国時代の鎧兜よろいかぶと姿はもはや時代遅れであることを、幕府も諸

藩もよく承知していたわけだ。実際、鳥羽伏見の戦いに端を発した戊辰戦争ぼしんでは、新政府軍、旧幕府軍とも洋服を着ての戦いとなったのである。

しかし、一般男性の洋装化は、維新が成った後もなかなか進まなかった。明治政府は、開化政策の一環として、明治四年（二八七二）八月九日、「散髪制服略服脱刀随意二任セ礼服ノ節ハ帯刀セシム」という太政官令を出す。

いわゆる散髪脱刀令であるが、これは散髪と脱刀の自由を認めるとともに、洋服を着てもいいよ、という緩いお触れであった。したがって、まだまだ及び腰の者が多かった。



（荻窪澤廣名）

明治初期、帯刀時代の珍服装（宮武外骨「明治奇聞」）



（鳥追おまつ海上新話）

ただろう。

翌明治五年に男性の宮廷服である大礼服がヨーロッパの宮廷服風のものに定められ、その後、警察、郵便、鉄道、官庁の制服が順次洋服になると、ようやく好奇心旺盛な者や新しもの好きから洋装化が進んでいった（洋服着たさに鉄道員の希望者が増えたという話もある）。

もっとも、明治九年（一八七六）に廃刀令が出されるまでの男の洋服姿には、奇妙奇天烈なものも多かったようだ。シャツとズボンを着用しているのに大小を差し、頭はチョンマゲで下駄を履いているとか、逆に頭は断髪、足元は靴を履いているが、着ているものは羽織袴であるとか。動物の進化に例えるなら、クジラになりかけのカバ、コウモリになりかけのネズミといったところだろうか。

明治七年（一八七四）四月二十九日の『新聞雑誌』は、そんな様子を「珍しき滑稽画を見るがごとし」と嘲笑する、外国人発行の新聞（独逸新聞）の記事を紹介している。また、明治九年（一八七六）七月六日の『東京曙新聞』あけぼのには、「仙台辺りの往来では、洋服を着た者を見かけると、たちまち犬が吠えかかる」という記事が見える。

当時の犬にとっても、洋服は目新しい存在ではあったろう。しかし、彼らが吠えたのは、おそらくそれだけではあるまい。「洋服を着た者」の風体が相当怪しかったからに相違ない。

2 女の洋服くアヒルが文庫を背負ったようく

女性の洋装化は、男性に比べるとほとんど進展しなかった。それには、政府関係者を含め日本男性の、いくら文明開化とはいえ、女はやはり和風がいいとする女性観があったろうし、教育機会の少なかった日本女性の側も、洋服に対する抵抗感が強かったに違いない。

そんな中、明治五年（一八七二）一月の『日要新聞』にちように次のような記事が出ている。

「稀有の物好きなき者もいるようで、東京坂本町の芸者小みさの妹せいらんは、歳十四ばかりだが、中国風の剃頭ていとうに洋服を着用し、月琴げつきんを携えて客に招かれ、酒席でもてはやされているそうだ。あ人の句。人まねに芸者もさるの歳はじめ」

前後して、京都、長崎でも芸者が洋服を披露する「事件」が起こっているが、洋装女性の出現はもっぱら水商売関係に限定されたようで、進取の精神に富んだ女性の出現というより、オーナー側の客寄せ戦略だったのかもしれない。

その後も一般女性はほとんど洋服に無縁であり、女学生ですら洋装を憚はばって、むしろ、それまでは日本男性の服装であった袴姿を流行らせた。ただ上半身は、小袖などの和服をベースにしつつも、下着のシャツやショール、ハンカチーフなどささやかな洋物を取り入れ、おしゃれを楽しんだようである。

唯一、明治十年代後半の鹿鳴館時代に、上流階級の日本女性がバスル・スタイルのドレス

で舞踏会に登場する。バツスル・スタイルとは、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけてヨーロッパで流行した本格的な西洋ファッションで、ウエストをグッと絞り、腰の後ろのほうだけを膨らませた衣装デザインである。

しかし、日本女性の体形や所作にこうしたドレスは馴染まなかった。内股で尻を振る歩き方がチグハグで、外国人にはもっぱら不評。「アヒルが文庫を背負ったよう」とけなされた。

もっとも、鹿鳴館での夜ごとの舞踏会は、平等条約の解消に向けた国策の一環であり、それを無理矢理背負わされた彼女たちを嘲笑するのは酷というものだろう（この時期、政府要人も女は和風が良し、とばかりは言っていられなかったのである）。

日本女性の間に洋装が広まるのは、不幸にも関東大震災（一九二三年）と白木屋大火（一九三二年）がきっかけであった。多くの和服女性が犠牲になった被害の実態から、ズロースの着用を含めた、災害に対応しやすい洋服への転換が進んだのである。



バツスル・スタイルの日本女性たち
（明治21年須藤南翠「緑装談」）

3 散切り／吊るされた数百の鬘

文明開化を象徴する最たるものといえば、何はさておき散切り頭であろう。「散切り頭を叩いてみれば、文明開化の音がする」のフレーズは小学生でも知っている。

「半髪頭（チョンマゲ）を叩いてみれば、因循姑息の音がする。総髪頭を叩いてみれば王政復古の音がする」に続く俗謡の一節だ。

さて、チョンマゲという世界的に見ても異端な髪形は、戦国時代の終わりに始まったらしい。兜をかぶる武士が、頭が蒸れないように月代を剃るようになったといい、江戸時代になって広く武士や平民男性の間で定着した。

特殊な風習だからこそ、余計改めるには抵抗が大きかったのかもしれない。明治四年（一八七二）八月九日に散髪脱刀令が出たあとも、チョンマゲの断髪はなかなか進まなかった。

総髪は幕末に流行した月代を剃らずに後ろで束ねる髪形で、頻繁に髪の手入れをする経済的余裕のない志士や浪人などが取り入れた。坂本龍馬や木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、近藤勇も皆総髪である。

総髪の者は髪形が中途半端だけに、チョンマゲの者ほどには断髪に抵抗感がなかったのではない。実際、木戸、大久保、伊藤らは維新前後に早々と断髪している（冒頭の俗謡は、布告の三カ月前に木戸孝允が、広報のため新聞に載せたものとされる）。



しかし、断髪に対する一般庶民の抵抗は根強く、明治六年（一八七三）三月には敦賀県（現福井県）で断髪脱刀令に反対する一揆が発生し、六人が騒乱罪で死刑に処された。一方、同じ三月に明治天皇が自ら断髪、八月には滋賀県が「チョンマゲを切らない者に税金をかける」という布告を出した。

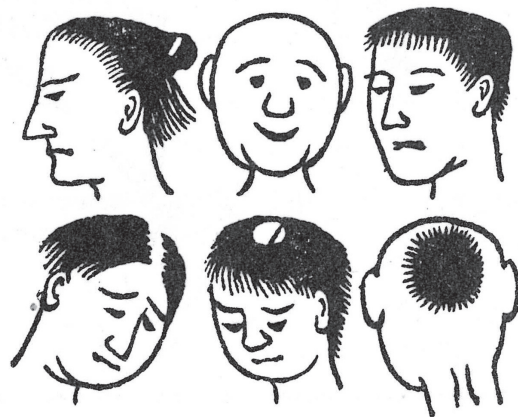
同年九月、岩倉具視とらみ率いる使節団が欧米から一年十ヵ月ぶりに帰国するが、出発時一人チョンマゲだった岩倉具視は、途中シカゴで断髪し、すっきりした散切り頭に変身していた。そんなこんなで、ようやく散切り頭は全国に広がり出したようである。

断髪を請負う散髪屋として、明治二年（一八六九）に早くも「西洋散髪司」、「西洋髪刈所」といった看板が横浜に上がる。目ざとい髪結屋が居留地の外国人から洋風理髪りはつのノウハウを学んでいたのだ。

ただ、そういう機会に恵まれない地方では、床屋の技術力不足で様々な「珍髪形」を誕生させたようだ。明治六年六月二十五日の『東京日日新聞』によると、「愛知県下では散髪の種類が甚だ多く、尋常散髪あり、坊主あり、四隅を剃った円座頭あり、中央に窓かっぱした河童頭あり、前頭に溝筋のある曲突頭きょくとうあり」といった具合であったらしい。

また、明治十年（一八七七）の『大阪絵入雑誌』第三号には次のような記事がある。

「東堀下大和橋西入の髪結床では、切った男の髷を数百個吊るしてあるそうだが、開業してからここで開化風の斬髪に改めた衆生の黒髪か、あるいはこのほど戦地へ出陣した抜刀隊が、決



様々な散切り頭（「明治奇聞」）

死の覚悟をもってこの床屋で一度に断髪したものの、云々」

抜刀隊とは、西南戦争時に警察官からの選抜により編成された白兵戦部隊である。記事では、この奇妙な光景を店主の洒落心しゃれこころだろうとしているが、むしろ、散切り頭の量産によって開化政策に貢献していることをアピールする招牌しやうはい（看板）だったようにも思える。

ところで、断髪の副産物として流行したものに帽子（シャッポと呼ばれた）がある。髪を切って頭が涼しくなったから、といわれるが、頭を剃る月代のほうがよっぽど涼しかったのではあるまいか。

あるいは、散切り頭を見られるのが恥ずかしくて、「照れ隠し」の意味合いがあったのかと思いきや、石井研堂けんどう著『明治事物起源』によると、明治九年（一八七六）に天皇の東北巡幸があった際、福島県郡山で開拓功労者二十余人が拝謁はいえつに及んで脱帽したところ、チョンマゲの者が数名いたという（帽子はチョンマゲ隠しのため？）。

ともあれ、断髪の普及に伴い、シルクハット、パナマ帽、ヘルメット帽、鳥打帽とりうちなど多種多様な帽子が人気を呼んだ。

17 凌雲閣く日本初のエレベーターは釣瓶式く

バベルの塔の時代から、人間というものは力を持つと、やたらと高いものをつくりたがる生き物のようだ。西洋の建築技術をマスターした日本の建築関係者は、明治二十三年（一八九〇）十一月、東京浅草に凌雲閣りよううんかくという、十二階建てで高さ五十二メートルの高層建築物を完成させた（浅草十二階とも呼ばれた）。十階までが煉瓦造り、十一、十二階は木造であった。

十階から十二階が眺望室で、九階以下は物品販売店や演技・舞踊場などが占め、眺望室からは東京の半分と遠く房総半島も見渡せたという。

十二階建てともなれば、階段で上るには骨が折れる。そこで登場したのがエレベーター（昇降機）である。エレベーターは、一八五八年にアメリカで実用化されていたが、日本ではこれが初お目見えであった。

一階から八階の間に二基設置され、窓付きで入り口を除く三方には、座布団を敷いた腰掛が用意されていた。なお、このエレベーターは片方が上がれば片方が下りる、いわば井戸の釣瓶のような方式であった。

これを証明する川柳が二句、『明治事物起源』に紹介されている。

「乗ると直ぐ持ち上がる十二階 柳月」

「乗ると下から持ち上がる十二階 同人」

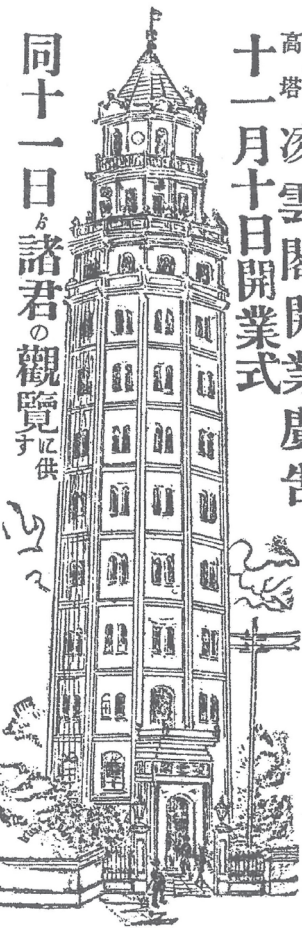
凌雲閣は世間の関心を大いに集め、開業最初の日曜日には六千人が詰めかけたという。ところが、肝心のエレベーターは開業後故障が多く、警視庁の調査で落下防止装置が不完全ということで、翌年には使用中止になってしまった。

エレベーターが動かないとなると、階段を十二階まで歩いて上がる来場者はたまったものではない。そこで、階段をのぼりながら楽しめる企画が考えられた。それは、美人芸者百名の写真による人気投票であった。題して「百美人」。

四階から七階にかけて縦横二尺（約六十センチ）余りの写真を展示し、来場者が好みに応じて

高十二層 凌雲閣開業廣告 十一月十日開業式

同十一日 諸君の觀覽に供す



縦覧料 大人八錢 小兒四錢（下足料要せず）
凌雲閣々内廣告一手取扱

浅草公園 廣雲社
京橋區南鍋町 二丁目一番地

廣雲社

凌雲閣開業の新聞廣告（明治23年）

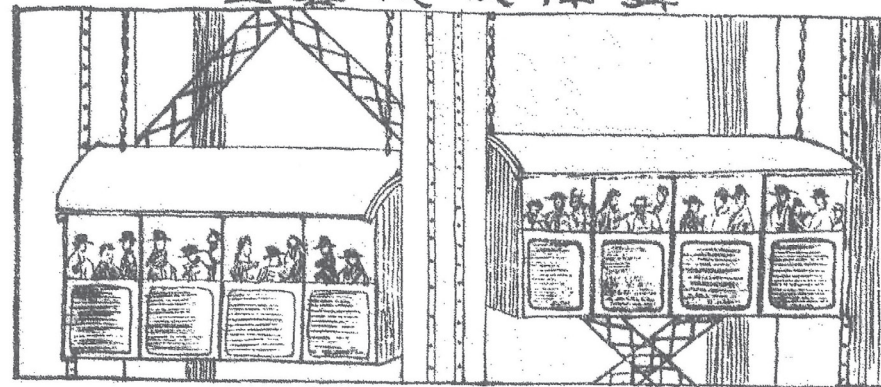
投票するのである（開票結果は写真の肩に記された）。

いわばミスコンの走りのようなものであったが、この企画はままと当たり、明治二十四年十月二十一日の『東京朝日新聞』によると、一位になった芸者を巡って、某局長と某議員の間で身請け競争が発生するほどの過熱ぶりであった。

ところで、明治二十四年（一八九一）十月十三日の『郵便報知新聞』は、凌雲閣が欠陥エレベーターに関して、製作元である東京電灯株式会社の社長を東京地方裁判所へ訴えたと報じている。この頃はまだ電力供給そのものが不安定な時期で、エレベーターの登場は時期尚早であったのかもしれない。

そんな訴訟沙汰を経て、凌雲閣のエレベーターは大正三年（一九一四）に復活するが、同十二年（一九二三）九月一日の関東大震災で、凌雲閣は八階から上が倒壊、残った部分も傾いたため、陸軍工兵隊により爆破解体された。

昇降機械圖



凌雲閣のエレベーターの図（明治23年2月「工談雑誌」）

18 奇怪な人造富士く暴風でもろくも崩れた張りぼて展望所く

凌雲閣が建てられた頃は望楼^{ぼうろう}建築のブームで、大阪でも九階建ての同じ凌雲閣という名の建物が完成している。おそらくは、明治二十二年（一八八九）に開催されたフランスのパリ万博において、目玉施設として建設されたエッフェル塔が、入場者数二百万人を記録する大盛況だったことの影響を受けたのだろう（実際、凌雲閣は開業前から「浅草にエッフェル大塔」と宣伝された）。ところで、浅草に凌雲閣ができる少し前の明治二十年（一八八七）、同地に寺田為吉という香具師^{かぐし}が、高さ三十二メートルの木造の人造富士を築いている。

為吉は、浅草五重塔の修繕中に、足場を利用して一銭の料金で見物客を五重塔に登らせているのを見て、はたと閃いたらしい。東京市内を一望できる展望所を、しかも天下の霊峰富士を模して造れば、絶対に儲かると踏んだわけである。

この人造富士、内部にらせん階段が設置されていて、「老幼婦女」も楽に登れたらしく、日に数千人が入場して、為吉は思惑通り相当の利潤を得た。しかし、如何せん木や竹の骨組みに石灰を塗っただけの「張りぼて」のつくりだったので、二年後の暴風雨でひとたまりもなく損傷し、撤廃のやむなきに至ったという。

被災した人造富士の姿は、「白粉^{おしろい}の化粧を洗い落とし、骨を露わにしたる（卒塔婆^{そとば}）小町を観るより凄し」と『明治事物起源』にある。



著者プロフィール

鳥越一朗 (とりごえ・いちろう)

作家。京都府京都市生まれ。
 京都府立嵯峨野高等学校を経て京都大学農学部卒業。
 主に京都や歴史を題材にした小説、エッセイ、紀行などを手掛ける。
 「天下取りに絡んだ戦国の女～政略結婚クロニクル～」、「恋する幸村～真田信繁（幸村）と彼をめぐる女たち～」、「杉家の女たち～吉田松陰の母と3人の妹」、「ハンサムウーマン新島八重と明治の京都」、「電車告知人」、「京都大正ロマン館」、「麗しの愛宕山鉄道鋼索線」、「平安京のメリークリスマス」など著書多数。

おもしろ文明開化百一話 ～教科書に載っていない明治風俗逸話集～

定価	カバーに表示してあります
発行日	2018年1月1日
著者	鳥越一朗
デザイン	岩崎宏
編集・制作補助	ユニプラン編集部 鈴木正貴 橋本豪
発行人	橋本良郎
発行所	株式会社ユニプラン 〒604-8127 京都府京都市中京区堺町通蛸薬師下ル 谷堺町ビル 1F TEL075-251-0125 FAX075-251-0128
振替口座	01030-3-23387
印刷所	株式会社谷印刷所
ISBN	978-4-89704-445-3 C0021

百瀬響『文明開化失われた風俗』吉川弘文堂、二〇〇八年
 横瀬夜雨『史料維新の逸話』人物往来社、一九六八年
 下川耿史編『近代明治・大正子ども史年表』河出書房新社、二〇〇二年
 下川耿史編『性風俗史年表明治編』河出書房新社、二〇〇八年
 下川耿史『混浴と日本史』筑摩書房、二〇一三年
 福永肇『日本病院史』ピラールプレス、二〇一四年
 野々上慶一『文明開化風俗づくし』岩崎美術社、一九七八年
 宮地正人・佐々木隆・木下直之『ビジュワル・ワイド明治時代館』小学館、二〇〇五年
 戸田欣堂ほか『明治政治小説集（二）』筑摩書房、一九六六年
 山本三生編『現代日本文学全集第一篇』改造社、一九三一年
 ヴァン・リード主宰『もしほ草』横浜新報、一八六八年
 仮名垣魯文『牛店雑談 安愚楽鍋』誠至堂、一八七一年
 文部省音楽取調掛編『小学唱歌集 初編』文部省、一八八一年
 松浦武四郎『北蝦夷余誌』一八六〇年